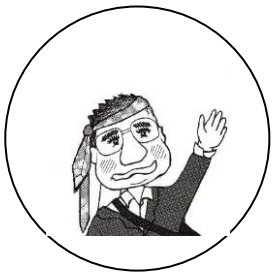
インド大魔王のエッセイ　　２０２６年元旦号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第 3 マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

謹賀新年

新しいＡＩ時代、そして古い「てつがく」の輝き

ノーベル生理学・医学賞に坂口志文先生、ノーベル化学賞に京都大学北川進先生が受賞した。おめでたい話題である。お二人のモットーは「無用の用」と「素心」だそうである。

「無用の用」は、荘子のことばだが、全く忘れていた。学生時代に熱をいれて勉強したはずだが、記憶から抜け落ちていた。国語辞典によると、無用とされているものが、かえって用をなすこと、とある。「素心」は新漢和辞典によると、飾りのない心、潔白な心、平素の心、常日ごろの考え、本心とある。出典は中国の『菜根譚』だといわれている。

朝日新聞（2025-10-09）に、北川先生の先輩のコメントが載っていた。

北川先生の研究には「哲学」があった、と言う。「ただ実験して何かを発見する、というだけでなく、『哲学』をもって全体の研究を発展させていた。ものすごく個性的な研究で、ここと思ったことを粘り強く研究していた」

地球規模の問題解決に役立つ新素材の開発ということだが、わが輩は化学についての見識がないので、それのどこに「哲学」が関わってきているのか理解できていない。おそらく、物質としての宇宙の「全体像」的発想が、インド哲学的な〝浸透論〟に近いのだろう、とわが輩は勝手に推測している。

それよりも、坂口志文先生のお名前が哲学に由来するというのは興味深い。「志文」は学問を志すを意味し、イエスの十二使徒の一人「シモン」からきている。名付けたのは父・正司さん（京都帝国大西洋哲学）だという。滋賀県長浜出身なら、びわ湖畔でキリスト教を宣教していたウイリアム・ヴォーリズの影響を受けていたのかもしれない。ヴォーリズは建築家でもあり、あの有名な塗り薬メンソレータムの近江兄弟社の創業者である。

この一支流がインドのガンディーに繋がっていくのだが、これは別の機会にゆずることにする。今いえるのは、立ち飲み屋で近江兄弟社員と出会い、ときどき盃を傾けたことぐらいである。営業所がわがミトラ城の近くにある。

坂口先生は文系ではなく、団塊世代の厳しい受験戦争を乗り越え、医系の研究者になられた。文系では食えない、と父君は考えて理系を勧めたと言われている。しかし、幾分か父君

の哲学的思想の影響を受けていたであろう。

　このように、ノーベル賞受賞者（理系）を鑑みると、「哲学」も捨てたもんじゃない。「哲学なんて、何の役にも立たない。頭でっかちになるだけ」と、わが親父さまは案じた。
（安心して下さい、親父さま。頭が固くなるほど勉強しなかった）
　わが卒論審査の恩師は、理系から文系に転向した学者である。恩師が言った。
「哲学は就職に役立たないが、なんにでも役にたつ！」
　どのような職種に就こうが、人間が生きてゆく限り、存在している限り、「生きる」という意味から分離して生きることはできない。その意味こそが「てつがく」なのである。頭でっかちになって「哲学」を学ぶ必要はない。それは学者さまのお仕事である。

　科学・化学の技術の発展には、目を丸くするものがある。それで便利になったと読者諸氏は思われるであろうか。
　通勤電車に乗ると、皆さん一斉にスマホ携帯をいじりだす。知識欲旺盛ではなく、情報欲旺盛だ。確かに便利だが・・・(そんなに知ってなにをするの)。見回すと、数名の年配者だけが本を読んでいる。
　わが輩はいつも優先座席に座って本を開く。妊婦らしき女性が乗ってきたが、若そうな人誰も席を譲ろうとしない。そこでわが輩が立った。それを見ていた外国人カップル（香港チャイニーズ）が、わが輩に席を譲ろうとした。わが輩は「あなたはお客さまだから・・・」と断ったが、その様子を聞いていたのに誰もスマホから目線をそらさなかった。まるでＡＩロボット型人間だ。
　科学・化学の技術は発展したが、「人間」としての「何か？」が進歩していないようだ。

　科学者は「限界人間」に代わるロボットに、様々なパターンを学習させて、瞬時に正解をだすシステムを考えだそうとしている。そこで、わが輩は次のロボット製作を提言する。
〇笑いをとろうとして、すべってしまう芸人ロボット。
〇今度こそ、ちゃんとやろうとして出来ない、または出来なかったロボット。
〇「のろま」「どん感」と言われながら、わかっているけどゆっくりしかできないロボット。
〇ときどきもの忘れするロボット。
〇うそつき、借金をするロボット。
〇苦しみから逃れるために自殺（自己破壊）するロボット。

　正解と不正解の繰り返し、善と悪の混在、無関心とジェラシーの心理的葛藤、それらの「混迷」の内にいる限り、まだまだ人間模倣の「完全ロボット」の出番は遠い。なぜなら、曖昧さ＆いい加減さは、人間の優れた「特性」だから。そこに人間の存在意義がある。
　いつも 100 点を取る人間なんて、つまらないし、面白くもない。インドの神々だって 100 点満点ではない。いろいろな神さまが寄り集まって、なんとか 99 点なのだ。

　今年はスマホ画面から目を外して、混沌なる世界のうちに、「素心」をもって、古い「てつがく」の輝き、「無用の用」を探し求めてみよう！